

検索キーワード

進貢 北京

進京使節

福建 福州

閩



きいむんの

どろ～ちゃいむにいへ

- 第10回 - テーマ 北京への道のり

イイソウグアチデービル(良いお正月ですね)! きじむんです。 皆さん明けましておめでとうございます。今年もよろしくおねがいます!! いよいよ沖縄も寒くなってきたね。皆さん風邪ひいてない? 図書館に暖房はないから、冷えないように気をつけてね。ロビーに膝掛けもあるから良かったら使ってね～。

さて、今回は、この時期に沖縄を離れはるばる中国は北京まで向かった、進貢使達についてです。

「進貢使」とは

琉球国が明清時代を通じて定期的に中国に使者を派遣し、朝貢関係を維持していたことは、第2回「冊封使がやってきた!」でも述べているとおりです。進貢使とは、琉球国が中国皇帝へ派遣した使者のことで、清朝では2年に1回が定例となっていました。二隻の船で総勢200名が乗船し、硫黄・銅・錫といった貢物(皇帝への献上品)や、昆布やナマコ等の貿易用の海産物を搭載し、北東風にのって那覇から福州へと海を越えて向かったのです。

北京までの道のり

那覇から福州までは、慶良間島や久米島を經由し、順調に進んで船で数日かかります。しかし、順風に恵まれずに出航できないまま数ヶ月待つ場合もあれば、出航した後天候不良により全く別の地に流されてしまうこともありました。中国への旅は非常に危険を伴うもので、琉球で「唐旅(とうたび)」といえ、この中国への進貢使節の旅を指すのとは別に、死地への旅をも指すとされた程です。

さて、福州に着くと、使節団は三つのグループに分かれます。次の年の夏には琉球へ帰国する「摘回(てっかい)」グループや、暫く福州に駐在する「存留(ぞんりゅう)」グループ、そして中国皇帝に謁見する為に北京へ向かう「進京」グループです。進京するグループは正使耳目官(せいしじもくかん)、副使正議大夫(ふくしせいぎたいふ)、朝京都通事(ちょうきょうとつうじ)等の役人やその随行人等20名で構成され、それに土通事(どつうじ:中国人の琉球語通訳)や伴送官(ばんそうかん)といった中国側の役人とともに水路や陸路を使い、北京を目指しました。北京では、皇帝への文書(表文)や貢物を献上する儀式「上表貢納(じょうひょうこうのう)」をはじめ、様々な宴席や儀礼などがあります。中国北京の故宮博物院蔵の「万国来朝図(ばんこくらいちょうず)」には、琉球や朝鮮等の国の使者の様子が描かれています。琉球国からの使節は様々な儀式や宴会に朝鮮や他の朝貢国とともに出席し、時には、皇帝が作成した詩に合わせて琉球国の使者が漢詩を作る事もありました。

様々な行事に参加をした使者達は、再び福州へと移動し、一行を迎えるために琉球国が派遣した船(接貢船)に乗船して夏頃の季節風に乗じて帰国の途につきました。

今回の中の人(執筆担当 T)は初めて紫禁城に行ったとき、あまりの広さにとっても驚いたんだって。きっと進貢使達もびっくりしたんだろうな。そして、きっと寒かったはずよー。

では皆さん、今年も良い年になりますように! (沖縄資料担当 T)

画像

●「万国来朝図」

『中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」』
(発行: 沖縄県立博物館・美術館 2008年)より

《参考文献》

●清代琉球使節の進貢日程に関する研究 / 陳碩炫 [著] [377.5 / 博人文 / 2008]

●中国福建省・琉球列島交渉史の研究 / 中国福建省・琉球列島交渉史研究調査委員会編 [201.18]